

# CAPNA

## キャプナ★ニュースレター

### 白雪姫のお母さん

子どもの虐待問題に関心を持ったきっかけは『白雪姫』の物語でした。原作では、姫を毒殺するの継母でなく実の母だと知って大変ショックを受けました。私も含め人々の心の中には「お母さん＝聖母」という理想に近い幻想が存在していて、知らず知らずのうちに女性を「清く優しいお母さん」の型に押し込んでいくような気がしてならないのです。

先日、高校生対象の虐待問題についての講座で、参加して下さったお子さんをお持ちのある方がこう話されました。

・・・子育ての悩みを相談しに行くと、どこに行っても「お母さん」って呼ばれるんです。私には名前もあるのに。「お母さん」をしているのが辛くて相談しているのに、ますます追い詰められるようで・・・

私は知ることによってその問題が存在すると考えています。

知らなかったら何ごととも始まらない、無意識に人を傷つけることにもなるかもしれない。『白雪姫』を原点に、私は児童虐待に対して問題意識を共有するCAPNAのメンバーと出会えました。これからもこの頼もしい仲間と共に「知ること」のお手伝いをしていけたらと思っています。

CAPNA 理事 広報担当 柿本 里佳

Vol. 19

## 法人会員を募ります

子ども虐待が大きな社会問題になる中、CAPNAの使命も大きくなる一方です。

経営基盤を安定させ、より幅広い形で虐待防止活動を進めていくために、CAPNAは会員の拡充を進めています。そして、今年度からは正式に法人会員を設け、支援をお願いしています。法人会員は、年会費 20,000 円以上。口数に応じて会員証が送られます。また、総会での議決に参加することもできます。皆様もぜひ、お知り合いの団体、企業などに「CAPNAの応援団になって」と声をかけてください。

## 同報メールを始めました

前号でお知らせしたCAPNAの同報メール（不定期に、会員の皆さまにお送りする電子メール）が8月中旬にスタートしました。初回は、CAPNAのイベント案内、出版物紹介のほか、CAPNA関係者が出演するラジオ番組のお知らせなどを掲載しました。

すぐに情報を伝えられて、パソコンの中に情報を保管できることから、同報メールはいろんな形で活用できそうです。皆さまもぜひご加入ください。

登録を希望される方は、管理者・加藤（[katotsu@mvh.biglobe.ne.jp](mailto:katotsu@mvh.biglobe.ne.jp)）まで「登録希望」と表題をつけ、お名前、メールアドレスを記入のうえ、メールをお送りください。

## 犯罪被害者・加害者へのサポートを考える

CAPNAの市民講座「犯罪被害者・加害者へのサポート」が8月23日、名古屋市女性会館で行われました。講師は、CAPNA監事でも日本福祉大学教授の山口幸男さん。昨年設立した日本司法福祉学会の学会長でもある山口さんは、家裁の調査官時代の経験、留学中に見聞したイギリスのサポート体制などを紹介しながら、犯罪被害者・加害者双方へのサポートを充実させる必要性を強調しました。会場はほぼ満席で、熱気に包まれていました。

「加害者支援」は日本ではまだまだ理解されにくいテーマですが、加害者が同じ過ちを繰り返さないよう再起を助けていくには、罰することとは別の支援も必要です。10月15日午後6時30分から、名古屋市中区東新町、中電ホールで、アメリカの犯罪者・依存症者回復施設・Amity（アミティ）のナヤ・アービターさん、ベティ・フレズマンさんの講演会を開きます。CAPNAが事務局を務めます。これは、子どもの虐待防止にも共通する問題です。ぜひ、ご参加ください。お問い合わせは、CAPNA事務局＝052(232)2880へ。

### CAPNAニュースレター19号（隔月刊3号）

2001年8月30日発行 定価50円

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

ホームページ <http://www2.ocn.ne.jp/~capna/>

# 虐待防止の思い、届けます!

ことしのCAPNAのキャッチフレーズは「出前」です。CAPNA主催の市民講座、シンポジウムなどは、どうしても名古屋が中心になりがちですが、県内全域で虐待問題への関心が高まる中、より多くの方々にCAPNAの活動を知っていただくには、私たちが足を運ばねばなりません。そうした出前の啓蒙活動をスタッフが報告します。

## 虐待防止のきずな深めて…豊田シンポ

「私は、意気地なしなんかじゃない!。私は、私を好きになっていいんだ!」—照明を絞った舞台上、CAPNA劇団の女優たちの声が響き渡りました。聴衆は物音一つ立てず、朗読劇に引き込まれていました。

8月5日、豊田市のJ A豊田で開かれたシンポジウム「子ども虐待をなくすために」は、同市子どもの虐待防止ネットワークの主催、CAPNAの協賛。虐待問題の本質を理解してもらうための朗読劇「舞う雪にさっちゃんの歌が聞こえる」、CAPNAの虐待死事件の調査報告、中京テレビアナウンサーの緒方喜子による取材体験の講演、そして、地元ネット関係者とCAPNAメンバーのパネルディスカッションと、4時間の長さを感じさせない充実した内容でした。参加者は350人にのぼりました。

このシンポを企画したのは、豊田市内の病院に勤務する高橋昌久医師(CAPNA理事)。同市の市制50周年関連市民事業に応募し、助成金を確保、会場探し、ボランティア集め、報道依頼…と大車輪の働きでした。隣接する藤岡町で悲しいせつかん死事件が起きたのは、昨年秋のこと。より確かなネットワークをつくりたいと願う地元の関係者たちの思いとCAPNAの社会資源が、シンポを成功させたといえます。

**高橋昌久医師の話** 私は臨床医のため、CAPNAにさける時間が少なく、地理的にも遠いことから、自分で責任を持ってプロデュースできる(お金も集めてくる)企画をCAPNA理事会にあげて、小規模な勉強会・研修会みたいなものを地元でやりたいと考えていました。運良く、豊田市制50周年記念事業の助成金を得られたことから▽入場無料(啓蒙が目的なので、一人でも多くの人に参加してほしい)▽組織的な動員に頼らず、自分たちで広報していく▽CAPNAは協賛の立場、実働部隊は現地スタッフで、開催後の人的財産を増やしていく—という方針で企画しました。おかげさまで好評で、フロアからは答えきれないほどの質問をいただきました。託児も21名お預かりし、ボランティアの高校生、大学生の頼もしさも知りました。また、同じ病院で働くケースワーカーたちのすばらしさも実感できました。



感動を呼んだ朗読劇「舞う雪にさっちゃんの歌が聞こえる」

## 児相の呼びかけに応じて…刈谷地区市民講座

これまでCAPNAの市民講座は、名古屋市女性会館で行うのが定例でした。でも、それだけでは来られる人が限られてしまいます。

5月27日、知立市中央公民館の大会議場で開いた刈谷地区市民講座は、CAPNAにとって初めての出張講座。講師は、東京都世田谷区で保健婦の立場から地域の虐待防止に取り組んで来られた徳永雅子さん(子どもの虐待防止センター理事)と、CAPNAの祖父江文宏代表のダブルキャスト。当初予定していた定員90人を大幅上回る120人の方々が参加しました。

きっかけは、刈谷児童相談所のワーカー萬屋育子さんからの相談でした。

「子どもが危険な時、児童相談所につないでくれる人たちの連携が必要で、それぞれの機関が自発的に虐待の予防、発見、援助活動をしなければ幼い命を救うことはできない。そうした意識を高めるために、セミナーを刈谷地区で開きたい」と、萬

屋さんは熱っぽく語りました。私たちにとっても、地域の啓蒙は重要な目標。理事会の承認を経て、CAPNAと現地スタッフの分担などを決め、てきばきと準備が進みました。

徳永さんは、育児困難のケースに対応する援助者の気構え、技術などを具体的な事例をもとに分かりやすく説明していただきました。「虐待は親を告発するための言葉ではなく、子どもとその家族または親を援助するためのキーワードとして使わなければならない」という言葉が心に残りました。また、保健婦などの援助者が親の信頼を得るために「表現力」が大切であることも強調されていました。

祖父江代表は、子どもの虐待を取り巻く最近の状況、今まで行政の「専門性」に任せていた私たちの責任などを訴え、成熟した市民社会を目指さなければ児童虐待は防止できないと強調しました。

二人とも、豊富な現場経験に基づいた、説得力のある講演でした。(上野 美子)

## 「障害と虐待」への第一歩 豊橋市・岩崎学園訪問

8月10日、豊橋市にある知的障害児の入所施設・岩崎学園にお邪魔しました。参加者はCAPNAの理事、事務局スタッフとCAPNA弁護士団の弁護士ら総勢12人でした。

同学園の園長さんと職員の方が7月に、ネグレクトケースのことでCAPNAに相談に来られたのが、交流のきっかけでした。

豊橋市の東部にある「葦毛(いもう)湿原」の近くで、田圃に囲まれた静かな場所でした。対応が難しい自閉症の子たちを中心とした施設でしたが、職員たちが余裕を持って、一人ひとりを受け止め、工夫しつつ世話をされている様子が印象的でした。まだ新しいグループホームも、見事な造りでした。

入所している子の10%ほどは、家庭で明らかな虐待を受けていたそうです。ネグレクトによってやせ細り、命の危険にさらされていた子もいたとうかがいました。

自閉症などの発達障害の子どもたちは、コミュニケーションがうまく取れず、多動、暴力などの問題行動も起こしやすいだけに、親が精神的に追い詰められて、憎しみを子どもに向けてしまうリスクはかなり高いと言えます。障害のある子が被害に遭う虐待死事件は、私たちの記憶にあるだけでも数十件にのぼります。報道されにくい問題だけに、潜在的な数も含めると、かなりの数になりそうです。しかし、今まで「障害と虐待」という観点でスポットを当てた研究は、ほとんど見られません。

「現場」から声を上げていく必要性を痛感しています。

これから、岩崎学園とCAPNAが障害と虐待の問題をお互いに考えていくために、情報交換などの面で協力し合っていこうと約束しました。(安藤 明夫)